

浄土

昭和十年五月二十日
昭和二十四年四月二十日
昭和五十年四月二十五日印刷
第三種郵便物認可
毎月一回一日発行
運輸省（特別授受承認雜誌）第三二五号
昭和五十年四月一日発行
第四十一卷
第五号



1975
5

一線を跳躍

風光自新

小橋麟瑞



一線を跳躍すれば
風光自ら新なり

小橋麟瑞

(神奈川県厚木市下宗寺住職)

風光とは浄土の風光です。念仏者にとつて浄土への坦道は開かれている。実存する現在から在りようは異つても、同じく実存の浄土へと進む。そこに横たわる一線、それを跳躍して展開する浄土の新風光に接するか、顧落して若惱の地獄に呻吟するか、一にかかつて称名念仏する者の上に在るでしょう。これは法然上人の選択証定、実験実証の教として仰ぐ所の旨趣であります。

現代の科学はオカルト（霊覚の世界）やテレパシー（遠隔交渉）、立休心理学の深層意識、易占哲学等の究明、さてはオーラム（後光）の撮影にまで及び、形而下学↓形而上学↓形而奥学に発展しつつあります。然しそれのみで一線を跳躍して新たなる浄土の風光に接することはできないでしょう。ナムアミダ仏の称名こそ永遠の道であります。 合掌

五 月 号



目

次

一線を跳躍すれば風光自ら新たなり……………	小 橋 麟 瑞
有為の奥山今日越えて……………	金 田 明 進…(2)
欧州宗教見聞録④「開教使<上>」……………	安 居 香 山…(5)
特集 こどものしつけ	
しつけの中心となるべきもの……………	古 屋 道 雄…(10)
生活の中のしつけ……………	中 川 洋 子…(13)
ハガキでひと言 念仏の恵み……………	…(16)

——梅原達雄・高橋晴江——

現代のモラルを考える④「食ばり」

「むさぼり」の心 ——欲望——……………	北 条 賢 三…(18)
人間性の回復を……………	坂 野 泰 巨…(21)
慈雲尊者の人間観……………	増 田 任 雄…(24)

ご法語に聞く 法然上人の人と生活⑤

想い出の人間像……………	宝 田 正 道…(28)
書の四季② 癸丑暮春蘭亭曲水の宴<2>……………	林 錦 洞…(32)
心の履歴書③……………	川 内 知 光…(34)
念仏ひじり三国志⑬ 法然上人をめぐる人々……………	寺 内 大 吉…(38)

表紙 久住静雄画

カット 大正大学美術部



有為の奥山今日こえて

金 田 明 進

(茨城県取手市弘経寺住職)

花もすぎて緑の天地がもえるようです。五月はいのちの生き生きとのびる季節です。「いろは匂へどちりぬるを」とうたはれますが色とりどりの花の色も香も、またたく間に散り失せてしまいます。「諸行無常」を教えただけです。世の中のものとはみんな例外なしに刻々と移り変ってゆくのです。「わが世たれぞ常ならむ」です。生まれた子供は日々には生育して乳児から幼児となり、小学生、中学生、高校生と育ってゆきます。変ってゆくのが本当です。変らなかったらおかしいので

す。花の春も、もう若葉の初夏を迎え、新緑となり深緑となり、植物もどんどん変り育ってゆきます。「諸行無常」はお釈迦さまの大切なみおしえです。この移り変わりゆくことを忘れて、私どもはいつまでも若くありたい、いつまでも財産をつかんでいたい、いつまでも健康でありたいとねがうのです。しかし私たちは年老いてゆくのです。貧に悩むときもあるのです。病気に苦しむこともあるのです。老いても貧しくても、病に臥しても、心強く生きゆく道があるのです。お釈迦さまは

生、老、病、死の四苦を解決して下さいたのです。

いま、いろはうたの話になりましたので、その次ぎの句を味ってみましょう。「うゑのおく山けふこえて」とつづきます「うゑ」は有為という言葉です。仏教では有為はまよいであって、無為のさとりを教えます。有為というのは自分中心の考えです。何事も自分がやったと考えるのです、私がわが家族をやしなひ、私がこの家を建て、私が努力して今日の置位をきずいたと思うのが有為です。本当はそうではないのです。すべて「おかげさま」のうちに生かされている自分なのです。家族のものに世話になり、みんなのおかげさまで今日の自分が生かされているのです。

有為の奥山を越えなければ本当の人間の世界はあり得ないということです。一切の天地自然、先祖父母、社会文化のおかげに生かされている私です。受くる所多くして捧げること

少き自分を恥ぢねばなりません。しかし、一切のお力に生かされていることに気づくことは、よほどの仏縁がないと出来ないものです。理屈の上ではわかってても、本当に今日の私が諸縁に生かされている、有り難いと気づくのは容易なことではありません。

お念仏を申し申し致しますと、有為の奥山を越える道が開られてくるのです。自分の力で生きると考えるのを自力と申します。お念仏は他力です。自力とは自分の力で努力勤勉、真の人生を歩こうというのですが、なかなか、その努力勤勉が出来ない私どもです。精進せよと教えられますが、その精進がつづけられない私どもです。私どもは凡夫なのです。凡愚なのです。貪慾に走り、瞋りによって人をうらみ、うぬぼれの強い、どうにも救われ難いおろか者なのです。

この凡愚のために阿弥陀仏の御本願があるのです。有為の奥山をこえるには念仏よりほ

かにございませぬ。頭の中、心の中で奥山をこえるではありません。口にナムアミダブツを唱えることの中に、奥山をこえゆく道が開られてくるのです。しかもそれは今日只今から念仏申すことが大切です。山を越えるのに遠くから眺めてばかりいては越えられません。風が吹こうが、雨が降ろうが、今日越えゆくこと、今々と実践してゆくのが法然上人のお念仏だと教えられます。私どもは日課念仏をお誓い致しております。毎日々々、朝昼夕、歩いていても、家にいても、坐っていても、臥しておっても、口にお念仏は申されるのです。今々に念仏申すことが本当の仏教信仰に生きる道と存じます。

かくして念仏申し申し、自分勝手な生活をすてて、ありがたい、相すまない、おかげさまでという他力念仏信仰の世界が開かれてくるのです。その世界はアミダブツの極楽世界ですが、いろはうたでは「あさき夢みじ酔ひ

もせず」とうたってあります。極楽浄土をこんなにわかりやすくうたってくださった、否「寂滅為楽」というような難解な文字を、やまとことばでいとも容易に翻訳された先徳に敬意をささげずにはいられません。有為の奥山をこえれば無為のおさとの極楽があるというのです。極楽とはゴクラクな所ではないのです。浅き夢みじと云うのですからウトウトと春眠の夢を楽しんでいるのではない、ハッキリと眼を醒ました世界が極楽だと教えるのです。又「酔ひもせず」ですから、アルコールや麻薬に酔うているのでもない。夢みじハッキリと眼の醒めた、不酔覚醒の世界こそ、極楽であり浄土であると教えられます。

以上は仏教の四句の偈「諸行無常、是生滅法、生滅々已、寂滅為楽」の教をいろはうたによって味ったのですが、お念仏がその中心であることを今更のように有難く受けとらせて頂くのであります。



欧米宗教見聞録

第四回

開教使

△上▽

安居香山

(大正大学教授)

浄土宗の開教使とされる人びとは、前に開教寺院の所で述べたように、北米・南米に限っている。北米では、ハワイが大部分で、大陸にはロスアンゼルスに野崎靈海師等がいるだけである。しかし、シカゴでは、後に述べるように三人の浄土宗僧侶が、それぞれの分野で活躍し、開教使と自称しながら浄土宗人として活躍されている。南米においては、サンパウロに日伯寺があるが、私はそこまで足を延ばしていないので、詳しい事は知らない。知恩院の鶴岡執事長が先年行かれ、日伯寺を中心とした日系人の信仰運動が活潑なのに感激されたことを聞いている。この六月頃にも、稲岡宗務総長が出向され、

開教活動に積極的な支援をされるということで、喜ばしいことである。

こうした開教活動は、日本人の移民と共に既成教団が競って行ったものであって、すでにその歴史も古い。然し、その当初における苦勞は並々ならぬものがあつたと思われる。それは、移民の人々の苦勞と行を共にしたものに違いない。長い時間をかけた開教使の苦勞が実を結び、今日訪れるわれわれの目からすると、日本の仏教などに見られぬ活潑さと、教化活動の結実を見るのであるが、そこには又、目に見えぬ苦勞があると共に、今日では数多い問題が横たわっている。

○ シカゴを訪れたのは、十一月六日、うす寒い日であった。アメリカの旅は、何か不安がつきまとい、心細い限



＜田中・無垢品・高橋の各師＞

りであったが、ここには三人の開教使がいて、四日間の滞在は、まことに楽しく、そして心強いものであった。その三人とは、無垢品在真、高橋俊洋、田中一男の各師である。電話番号が分っていたので、ホテルに着くとすぐ無垢品師に連絡したところ、

「すぐ参りましょう」

と自動車でかけつけて下さった。これらの人々は、シカゴを訪れる浄土宗人が、何かと世話になっている事は、後で知った。そして、この三人は、皆自動車を運転し、交互にシカゴを案内してくれた。全くこれ程までとは予期しなかっただけに、地獄で仏に会ったような喜びにしまった。

無垢品師が一番古くシカゴにおられ、自宅に仏間を設けて、仏事も行っているのであるが、何と言っても師の大きな仕事は、ラヂオによる活動で、已に十三年も続いているという。毎日の正午より一時までのワイド番組を、師自身がスポンサーを見つけて買い取り、自からアナウンサー、プロデューサーとなって、この一時間をフルに使っての大活躍なのである。一日私は招待された夜、この放送のテープを一時間たっぷり聞かせてもらったが、これは仲々大変なものであった。美空ひばりの歌

で始まり、都はるみの歌で終る一時間の中で、師は時事解説をしたり、ニュースを流したり、時にはスポンサーのコマーシャルまで入れて、とも角大変である。時々仏教の説教も入れるわけで、勿論これらの放送は日本語が大半である。シカゴには日本人が一万五千里いるということであるが、聴取者は八万人にも及んでいるという事で、日本人を通じて広く愛された放送となっている。その準備はさぞかし大変なことだろうと聞くと、

「始めのうちは大変でしたが、この頃では馴れて、それ程でもありません」

と事もなげに言われた。毎日曜の事であってみれば、馴れたと言っても大変である。とも角、こうした努力による布教活動を開拓し、これを十三年も続けられているということは、全く大変なことである。今や師は、シカゴの名物男になっている。変り種の開教使ということになる。

高橋俊浄師は、ロータリークラブの日本部主任として活躍中である。ロータリークラブと言えば、世界的な大組織だけに、師は世界中を東奔西走している。そうした中でも、月に一回は三人が無垢品師の所に集り、日本移民の人々と、法要をいとなみ、法話を交互にしてい

△ロータリークラブ本部前にて高橋師と共に▽



る。目に見えぬ開教活動が、ここではいろいろな形で行われているわけである。

田中一男師は、シカゴ大学図書館の日本部主任で、この活躍も、別な意味で特筆に値する。特に招かれて来たというだけあって、東洋関係の図書購入の実権は、師が握っている。仏書の購入なども、彼なりの緻密さで整備しているが、アメリカの一流大学に、こういう人が居るのは、何としても得難い人材と言える。師は私の教え子

という事もあった、滞在中、献身的に奉仕してくれた。上司の許しを得て休暇を取り、立派な自動車を運転しての案内であるから、こんな有り難いことはない。おまけ



＜田中師宅での送別会＞

にシカゴ大学はお手のものとあって、中国関係学者との昼食会まで開いてもらった。予定していなかった事だけに、有り難かった。

私がシカゴを去る前の日、彼の親しい友人達が彼の家に集まって、送別会を開いてくれた。近所に住む大学の教授連の家族で、短期留学の人々であった。異境に居て、互いに助け合っているわけであるが、心ずくしの寿司などを頂いて、一晩中、笑いが絶えなかった。長い旅の中で旅愁は、これで吹き飛んだ感が深かった。

シカゴ大学では、神学部々長に北川教授がおられ、要職にあって活躍中である。かつて大正大学にも出講頂いた事がある方であるが、日本人の特異な活躍者として、紹介しておきたい。

この回では、アメリカの開教使の活躍を、全般にわたって書く積りであったが、シカゴを書いていくだけで、紙数が尽きてしまった。開教使の数の多いハワイの事は、ここでは書く暇が無くなったので、次回に改めて書くことにしたい。ただここで、少しふれて置きたい事は、こうした開教事業にも、限界がでてきているという事である。シカゴの例を取ってみても、一万五千人の日本人を相手にして、数多い仏教宗派の寺院が、開教に当

っている。日蓮系、本願寺系、真言密系、禪宗系、更には新興諸宗教や、神道系まで、その数は多い。勿論、キリスト教系も数多く進出している。

おまけに、対象となる信者と言えば、移民当時の一世から、二世三世へと変って来ている。そこでは、日本語が次第に通じなくなっている。全然通じない人々も始めている。現に無垢品師の長男君にしても、お嫁さんはアメリカ人で、片言しか日本語で言えない。日本人の血を引いた人であっても、言語や、考え方はアメリカ的になっている。こうした人々を相手にしての開教は、従来のような開教では、駄目である。ましてや、日本語でやるなどという事は、無理である。無垢品師が考えられた布教法なども、こうした時点に立っての新しい試みなのである。こうした問題は数多い。この事については、次回でももう少し詳しく紹介してみたい。

サンフランシスコでは、禪寺の日曜礼拝に参詣した。集った人は十数人に過ぎなかったが、殆んど一世の人で、二世の人は父を亡くしたという若い夫婦だけであった。頼まれて一説教したが、此処に集った一世の方にも、已に八十近い人もいて近い将来、消えて行く人である。日本語の出来ない二世の時代になってしまえば、私

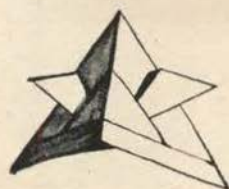
の説教も通じぬわけで、ここにも時代の流れと、それに伴う多くの問題が横たわっていることを、見ぬわけにはいかない。



＜サンフランシスコ禪寺の日曜礼拝＞

特集Ⅱ こどものしつけⅡ

しつけの中心となるべきもの



古 屋 道 雄
(社) 日本仏教保育協会理事長

顔は忘れても

車に乗りこむと席がひとつだけ空いておりました。あいている席だけが目にはいつて、早速腰をおろすとお隣りは婦人でした。「お久しぶり」と挨拶されました。

見ると十数年前の園児のお母さんで、そのお隣りのいけ花の束を持った娘さんが、母親と挨拶を交わす私をいぶかしげにのぞきこんだ。母親がたしなめました。

「ご挨拶しなさい。園長先生じゃないの、忘れたの」なるほど、ニッコリ笑うその顔に幼な顔が浮んできま

した。私が園長だったと知ると、娘は最近行って来た京都のお寺や、仏前にまつる立華に流儀があるかなどと、熱心に質問をつづけて、私の返事もタジタジでした。

母親の解説によると、この娘は生花の師範になるほど熱心で、この娘の従兄で同じ園児であった某君が、教育大学で鳥類の研究を専攻しているなど、園長先生の動物愛護、生命尊重の保育の影響をうけたものと思う、ということでありました。

私の顔は忘れても、幼年期二年の保育の間に、私の教育方針が母にも理解され、その娘に何かしら与えるものがあったということは嬉しい限りでありました。

今の家庭や教育機関の多くに少なくなつたもの、それは宗教性のある「しつけ」だろうと思います。

しつけの意味

「しつけ」ということを先ず考えてみましょう。身についた美德で、躾という字ができたときと通常いわれています。

「あの人は躾がよい」と、家庭や親の厳しい教えの成果を讃える場合は、行儀作法をよく仕込んだことに使われています。

美事に織つた反物という素材を、裁断し折り目をつけてきれいに縫い上げたものを、更にその効果を高め、いつも着くずれしないように、筋目を正しておくのが「しつけ」糸の役であります。

人の子と生まれたものに、ながい人生をわたるのに必要と思われる筋目をつける、これが「しつけ」であり、親や大人の役目と考えられます。

従つて、ただ押しつけられた行儀作法というせまいものでなく、こどもの生長の段階に応じて、精神的にも肉

体的にも円満なる発達をとげるようにする、教育的な働きに高めたいものであります。

しつけと保育

「しつけ」の始まりは乳児期の、基本的な生活習慣である「食事」「排泄」「睡眠」のこの三つであり、生命の維持にはこれらが最も大切で、三歳児までの初期に達成されなければなりません。然し生命の維持だけならば動物と変わるところがありません。次いで着物の着脱整理、健康、安全、言語の取得と、生活経験を通して、更に兄弟、友達と社会経験を広めるうちに、しつけられることが多くなります。

家庭におけるしつけと併行して、幼児期には集団保育があり、幼稚園保育園の教育では、健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作の六領域に分ける。しかしこれは小学校以上の学科別とちがって、幼児の発達段階に応じて、総合的に教育の場に用いられ、こどもの身につくように配慮されるのであります。

ただここまで申上げたなかに欠けているものがあります。

す。それは最近の家庭は核家族となり、家庭の構造も変り、仏壇も神棚もない家庭がふえて来て、宗教的なしつけが少なくなった。学校の主流をなすものは公立であるが、ここでは宗教教育は行なえないのであります。教育基本法では宗教の社会上の地位や宗教情操は尊重されなければならぬ、しかし公立学校では教育してはならないとしています。

家庭でも学校でも宗教軽視の風潮があるところから、現代は人間性が失われ、何か事があると迷信邪教にはしるということになりました。

しかし宗教上の「しつけ」といっても別にお詣りをさせるだけではありません。

食事のしつけから

俗に「三つ児の魂百まで」といわれていますが、幼少年期における教育、特に模倣性や素直な信頼感が強い幼児期は、宗教味のある「しつけ」を施すに最も適切な時期であります。

それは難しいことはありませんが、実際には近來こ

の日常の平凡な繰返しさえ、無視されがちになりました。

食事の際の天地社会の恩恵に感謝することは、「頂きます」「御馳走さま」を園では合掌して行ない、家庭に帰っても八〇％の子供たちがやり、親も殆どがいいことだといながら、親が行なっているのは五〇％以下というのが現実であります。

信頼する親が先ず挨拶をし、食作法をし、お花やお水をあげ、お初穂や頂戴物をお供えする、といった平常な日常活動の反復が必要なのです。

何ものか知らず、目には見えなくても、耳にきこえずとも、その何ものかに奉仕するところに、大いなるもの、神仙に通ずる心を養うことになります。

三つのねらい

生命尊重。動植物を育成させる。動物や草木を育てるうちに生命のあるものを大切にすることを養い、みだりに草木を手折ったりしなくなる。また、動植物の犠牲によって人間の生命の維持がはかられる、という現実生活に

感謝の念を持って行動するようになります。

無生物の「物」といえども、その社会的効用に生命力を感じるよう、例えば御馳走さまもそのような心を引き出す「しつけ」となる。これが天地にみちる大生命、すなわちアミダ様の慈悲の心を宿す基となるのであります。

仏道精進。仏教は人間の宗教であるから、当然生活の基準は仏法にあり、「しつけ」の目安もここに当然もとめることができます。



生活の中のしつけ

中川 洋子

(東京都杉並区在住
幼稚園勤務)

「せんせい、おはようございます」。今日も元気な声と一緒に子供たちが玄関にとびこんできます。「おはようございます」。一人一人に答えながら先生がたは、朝の仕事にいそがしくとび廻っています。幼稚園の朝は、ちよっと見ると雑然としているようですが、新学期が始ま

み教えに基くきまりを守ること。親切、奉仕、持続する力を次第に高めるなど、いろいろ徳目はあげられるが、「いつも仏さまが見ておいでになる」という、仏と共にありの自主性を育てることが大切であります。

共生和合。自他の存在を知り、自分と同じように友達も欲しいものやしたいことがある。共同の遊びや仕事や手伝をする。同じ仏の子であるとの社会性を養うようにしたいのであります。

つて二、三カ月もすると一定のリズムにのって動き出すものなのです。しかしこのリズムにのった流れは、時々たち切られます。幼い子供たちの行動が少々不安定になることのあるのは当然ですが、それが或る振幅を越えてしまうと、幼稚園の一日の生活のリズムが狂ってしまい

ます。振りすぎてしまった時計の振子のように、とび出してしまふ子供たちがリズムを狂わせてしまうのです。一体なにがこの子供たちをそんなにいらさせてしまうのでしょうか。原因は一つではありません。しかしその多くは、子供の住んでいる家庭環境、生活環境が大きく作用しているのです。つまり広い意味での生活の中のしつけが関係してくるのです。

辞典を開いてみますと「しつけ」とは、①仕付けること、したて。②田植え、植えつけ。③礼儀、作法をしこむこと、などの意味がのっています。しかし、「しつけ」が単に礼儀、作法をしこむことではないことは明白です。行住坐臥のすべてにわたって、その行動のみではなく、小さければ小さいなりにどんな心で一日の生活を送るかによってその子供の一生は変わってきます。この子供の生涯に影響するしつけについては、「むちをおしめば、子供が台なし」といわれるように、子供をしかったり、たたいたりしなければよくならないという、いわゆるスバルタ式教育と、子供の側にとって、子供の気持を充分、理解してその個性をのばして行かなければいけないという、いわゆる自由教育の考え方の二つがあります。しかし、現在の教育を見渡した時、しつけについての教

育は全く混乱しているようです。特に戦後の「民主的教育」が充分に理解されないままに取り入れられ、古いもの、権威体制に反対すればそれが自由、民主的な教育であるという考え方が広まり、「子供を自由にしつける」、などという意見もよく聞かれます。しからぬ教育、子供のこきげんをとる教育がより進んでいるという考をもつ人が子供の教育に当った結果が、今出てきています。自分の事しか考えず、無責任で、移り気な若者の増加がそれです。「三つ子のたましい百までも」といわれるように、人生で最も大切な子供の時のしつけのいかんによって、人の一生は大きく左右されてしまうことは先にもちよっとふれた所です。

子どもによい習慣をつけたら、よい、わるいの道徳的な基本概念をうえつけるためにはそのやり方と、時期が大切です。しつけの始めは簡単なことから始ります。「おはようございます」、「こんにちば」、「さようなら」というあいさつをきちんとさせることは、すでに立派なしつけの始りです。食事の習慣、睡眠の習慣、着衣の習慣、清潔の習慣など基本的な生活習慣は、家庭の中で家族のものすべてが心がけるようにすれば、子供は自然にそれを見習うようになります。「ながら族」というもの

がありますか、テレビを見ながらいつも食事をしている子供、おしゃべりばかりしながらおべんとうをいただく子供、いつもちょっとたべものを残す子供、好ききらいのはげしい子供の家庭はやはり大人たちも同じような生活を送っています。就寝時間の不規則な子供は幼稚園にきてもいつも気持が不安定です。自分で着物を着たりぬいだりさせることも自立心の発達に關係するよいしつけの方法になりますし、常に身の廻りをきれいにする習慣を養っておけば、日本人によくいわれる公衆道徳に欠けた人間を作らなくなります。善惡の区別がはっきりしない子供はよく「ウソ」をつきます。しかし「ウソ」は慎重に考えていきなり頭からしかってはいけないようです。例えば子供は「ボク、きのうアメリカへ行ってきたよ」などといいます。アメリカへ行きたいという気持ちが現実とごっちゃになってこういう発言が出てくるのです。お友だちの家へ遊びに行きたくてしかたがないときは、「おともだちに今日はよばれているから」といいます。こういうウソをしかる時にはそれをよく心がけておかなければいけません。家庭内のしつけに對して、お友達と仲よく遊ぶ、人のものをとらない、あそび道具の順番をきちんとまもるといった、いわゆる社会生活の上で

のしつけの問題が次につけてきますが、これらはやはり家庭内でのしつけがととのつていれば自然にできて行くものです。幼稚園での一日のリズムを乱す子供は、家中でも不規則、不安定な生活を送っているのです。基本的なしつけはいつ始めたらよいのでしょうか。極端に言えば生れた時がそのスタートラインですがこれは主に関の問題です。そして特に幼児期から、小学校一、二年までの間にしつけの基本的なものは終了してしまふようにしなければいけないといわれています。そんなに小さなうちからとか、こんな小さな子供をむやみにしかってはいかないそうだと思っているうちに子供はどんどん親の知らぬ方向へ行ってしまうことはよくある例です。

スパルタ式につめこむ教育の是非がよく話題とされます。しかし本當の自由教育、自由なしつけというものはまことにむずかしいものです。アメリカでは双生児を用いて自由なしつけと、厳格なしつけの結果を研究しているものもあるようです。しつけということは単に礼儀作法の習得にとどまらずその後の頭腦の發育、知識の習得にまで關係してくることを力説する学者もおります。家庭内での厳格なしつけはやはり必要です。身を修め、家をととのえ、社会を正しくし、国を興すことは、生活の

中のしつけ、幼児の生活の中でのしつけが最も大切なように思います。

月曜日の朝、子供たちは御本堂のみほとけさまの前に坐って手を合せます。園長先生のおはなしがあります。こうして始まる一週は子供たちがすなおで一日のリズムが狂いません。雨や、他の行事で、月曜の朝、みほとけさまの前に坐って集まることのなかった一週間は、子供

たちがなんとなくざわめきます。子供たちにいわゆる宗教心が芽ばえるのはこういう瞬間です。自然に対する恐れなどから人間の宗教心は生まれるといえます。しかし子供たちがよく判らぬままに宗教的なふんいきの中で生きて行くこと、これも広い意味のしつけの中に入ると思えます。月曜の朝の十五分が幼い者たちの将来のために大きな意義をもつようになるのです。



「ハガキでひと言」

念仏の恵み

梅原達雄

(富山県魚津市在住
大泉寺住職)

薫風五月お念仏のめぐみ

法然上人の結婚観は

最近私の妻の姪に当るお嬢さんが東京で華麗な結婚式を挙

げ、私もこの式に参列させて貰い、神前であったが、私がおめぐみの念仏を唱えていますと、隣りの席の妻が私をたしなめるので考えさせられました。私は目出度いからこそおめぐみの念仏を唱え、祝福申上げたのですが、私の妻をはじめお念仏に未熟な人は間違った念仏観をお持ちのようである。

私は本当に法然上人のおめぐみの念仏に生かされる者として、お誕生、入学式、成人式、結婚式等すべてお念仏で讃歎

し、供養をしていただきたいと思います。前述の若い奥さんも親ごさんの許して五重相伝も受けておられ、しあわせな結婚生活をスタートされたものと確信して、貴誌のハガキ通信に私の感想を述べさせていただいた次第です。

高橋 春江

(群馬県高崎市在住)

円光大師二十五霊場御詠歌というものがございませう。そう、法然上人の詠まれたお歌が残っているそうです。その中で、第十五番の伏見の源空寺という霊場の歌は、ひとこえもなむあみだ仏と云ふ人の

はちすのうへにのほらぬはなし

というものだそうです。わたくしは、このお寺にはまだ一度も行ったことがないのですが、このお歌にはたいへん心を寄せています。このような歌は、好きであるとか嫌いであるとかいうものではないのでしょうか、ただ法然上人が詠まれたということが、わたくしのようなものの心の確信となっているのです。

朝、家族のみんなを送りだして、ひとりでお念仏をいたします。先年小さな木魚を求めました。長い時間ではないのですが、「なむあみだぶつ」と申すひとときは、とてもすがすがしい気分を与えてくれます。「念仏の恵み」とは、こうして日々生かされていますわたくしの生活そのものではないのでしょうか。

〈会員の皆様へのお願い〉

陽春のうららかな気候が続いています。弊会も会員の皆様のご支援によって一歩一歩前進しています。ことに、月刊機関誌『浄土』については誌面の内容充実に努

◆ ◆ ◆ 新 年 会 費

二、〇〇〇円

◆ ◆ ◆

力し、増刷を目指して大いに励んでおります。しかしながら、先般来の諸物価、諸経費の高騰は、弊会運営の危機をもたらししています。そこで今回は左記のような年会費の値上げに踏みきった次第です。宜しくご協力下さい



貪 ぼ り

『現代のモラルを考える』

△第四回▽



「むさぼりの心」——欲望——

北 条 賢 三

(大正大学専任講師)

誰しもが思うことである。他人のものを見ては「あれが欲しい、これが欲しい」と。また同時に少しでも余裕があれば「これも上げよう、あれも使え」と。

我々が見聞きする限り、同一人でありながら、一方では我々が饜飮するほど欲を見せ、一方では驚くほどの気前が好い者もいる。人間である限り、心情の表現は複雑であるのは当然ながら、むさぼりの心——欲望——と与えるということは並

立しうるものであろうか。人間の種々に矛盾する生き方に対し、仏教は如何なる点で関り合うことが出来るのであろうか。今ここにその基本的姿勢を考えてみたい。

元来、積尊生誕の地インドは作物に恵まれながらも、自然の厳しさと人口のゆえか、個人はまず自分のことを第一に考えなければ、生きることのむづかしい国だったようである。従って、人間として生きるということは、物を求める心を失

つては自らの生命を失うことと結びついていた。その必然の結果が、職能階級の成立をみ、他人の領域を犯さぬよう自己の生活の場を互いに造り上げていったのであり、また、個人の生命の保持のため大家族制も形成されたのであった。

自然や環境が悪条件を多く持てば持つほど、その条件に耐える力を持つ者は勇者と見られ、耐える努力を美德と考えるのは当然である。従つて、古代インドで苦行・禁欲の生活は、最高の善であり、自處することによって欲望を否定し、それより離脱せんとする実践道が歓迎された。だが、それがためには世間とか人間的生活を捨離せねばならず、他の道によって寂靜の世界へ達する方法はいまだ見出されてはいなかった。

この苦行を善とする時代に、釈尊もその身を投じられた。仏伝を繙く者は釈尊が成道への道程において、六年に余る厳しい禁欲の苦行を為されたことは熟知のことである。そして限界に達せられ翻然とこれを捨て去り、心身安寧の状態に身を置かれた。このことは釈尊の厳しい苦行求道に敬意を払っていた者に失望を与え、非難の心さえ与えさせた。

この苦行を捨てられた釈尊の転期には、一体どのような心的変化があったのであろう。禁欲を捨て欲望を肯定したのであろうか。それとも、六年の苦行にあって欲望はみにくいも

の、在ってはならぬもの、否定すべきものとして自力で克服したのであろうか。これに対して經典では種々説かれているが、欲望に対しては肯定も否定もされた訳ではない。ただ周知の如く、苦行と快楽の兩極端を離れることを示している。南伝二三卷「自説経」などに見られるように、

「戒禁は生活なり、梵行は奉侍なりというはこれ一つの極端なり。」

諸欲のうち過ちなしというはこれ一つの極端なり。」と説かれるのを見ても、欲望を悪いものと断定している訳でもなく、欲望のままに身を置くことも悪いといきまるものでもない。その兩極端を廃し、中道を行うが道だというのである。そこには欲望を否定し去るもので無く、認めながらこれを戒めていることを知る。

經典はこの欲望をどのようにに見ているか管見してみよう。往年、釈尊は菩提樹下で、「一切は苦である。その苦は何によって生ずるのであろうか。」と問い尋ね、その原因に「無明」と「渴愛」とを見出した。前者は知的な迷いであり、後者は情意的な迷いを指すものであろう。この渴愛 (Utsa)こそむさぼり執着することであり、あたかも渴いた者が水を求めてやまぬが如き、むさぼる心の働きを指している。さらにこの渴愛に二種を置き、外界の対象に対して起るこの心の働

きに、愛すべき対象に対しては貪欲（むさぼり）を、好ましかからざる対象に対しては瞋恚（いかり）をたてている。この貪欲に対し原語は *greed* を用いているものであるが、その意味は「真赤な色」「愛好」「同情」「美」といった燃え上る感情を示し、まさに欲望の火が真赤に燃え盛る姿を写したものだといえよう。

我々が生活の中で、「むさぼり」と一語でいうとき、誰しもが何となく肌で感じ取ることが出来るように思われる。というの、我々が人間として生きる以上、これが全くあり得ないと言うことが出来ないほど、人間臭にからみ合った言葉だからである。いま記した「渴望」「貪欲」など「欲望」にかかわる言葉を吟味するとき、いづれも欲望そのものを表わす言葉ではなく、欲望の営み、欲望の働きを表わす言葉を使っている。しかし、そこには欲望を否定することなく認め、欲望を恐れることなくただ欲望の悪しき働きの過度に亘らぬことを警告しているのである。

従って、むさぼりを無くし、むさぼりに執着しないことは、欲望を無くすというのではなく、欲望の悪しき働きを無くすことであった。今若し欲望を正しく見極め、これを調御し、正しい働きへと推しすすめることが出来るならば、善への正しい欲望ともなりうるし引いては菩提を求める人の「願

い」という形も許容せられて来るのである。そこには、「むさぼり」を対治する「知恵」もまた要請されるであろう。

仏教に倫理的立場を依存する正統バラモン哲学の一つ「正理学派」も、一切は苦であり、その根本原因に「邪知」（無明）を置き、これによって過失（貪・瞋）が生ずるとし、無明を滅すれば貪・瞋も滅すとし、貪の滅に正知を要請している。これをみても、渴望を捨離し、正しい「願い」へと転ぜられる要素として「知恵」が相依の關係に立つことが知られよう。

さて、現代の人間に眼を転じてみよう。人々はそれぞれの欲望の趣くままに、ある時には文明という名で人間の欲望を満たそうとした。また、未知の世界を知るために「科学する心」という美名に隠れて、自己の好奇心を無限の空間にすすめ、あるいは神聖なものを曝露していった。さらに卑近な欲望を充さんがために、社会ルールを無視したり、人類の幸福だといひながら狭い立場より自己主張を押しつけ、いまや、勝手気侭で放縦のとめない泥沼にのめり込んでいった。

進歩した社会を見、これが欲望に基づいたものゆえに悪だときめつけることは、当を得たものでなく、また、進歩すればそれだけ善だということのも極端である。仏教にあって欲望を否定することが善とするなら、進歩というものの、向上という

ものを相反することとなる。仏教は欲望を決して否定し去るものではない。原語に見られたように「むさぼり」は欲望の激しい働きのさまであつて、これが苦の原因だといふのである。むしろ欲望が肯定されるからこそ人間存在の意味も生じて来るし、人間の限らない向上が予定される。

ここにおいて、限らない欲望の渦の中から、それを良く、正しくすすめ、人間を、社会を向上させてゆくものこそ、欲望の調御でありそのために「知恵」が要請せられ、その結果

極端を離れた正道も見出され、遂には進歩、向上と共に静安をも齎される。

ふり返って我々の生活・生き方を考えるとき、求める優越の世界は限りなく、それに身を置けば置くほど自己満足を追ふことに急となる。かつて釈尊が智慧をもつて欲望に燃える心の火を調御し涅槃に至られたことを思い起すとき、人類の進歩を正しくすすめる原理が、「むさぼり」という泥沼の中に、輝き息吹くのを感じとることが出来る。

人間性の回復を



坂 野 泰 巨

(神奈川県寒川町生住寺住職)

約五十年後——ニューヨークの人口は現在の八百万から四千万にふくれあがつた。電力、光熱、水など一般市民への供給は、ほとんどマヒし、夜は仕事も家もない群衆が軒下や階段にまであふれている。肉魚、野菜、果物などはヤミで買う

以外手に入らず、市民は政府が毎週一回だけ配給するウエフアース状の食品で命をつなぐ。原料のブランドンも底をついた。そこで食品公社は新開発によるウエフアースの配給を始めたが、それさえ追いつかず、市民の不平不満は、つねに

一触即発の危機をはらんでいる。いざ暴動となると、巨大な鎮圧用シヤベルカーで、ゴミか砂利でも運ぶようにどこかへ連れさられてしまう。

あるとき、一老人が公社の秘密を知って、自ら「安楽死ホーム」へ行き、ベットに横たわって、よき時代の美しかった光景をワイドスクリーンでみながら静かに死んでいく。シヤベルカーの群衆も、この老人もみな廃棄工場へ運ばれ、やがて……。

私は「ソイレント・グリーン」というこのSF映画をみて以来、どうしてもこれが空想の世界だとは思えないのである。

人口の過剰、食糧危機、エネルギー・資源の危機、異常気象、環境汚染など挙げればきりが無い。それらが相互に関連性をもって、地球をジリジリとおびやかしている。

このままいくと、今世紀の終りには地球上に六五億の人間がひしめきあう計算になる。

さらに来世紀の半ばには、一四〇億〜一五〇億になるという。今日でさえ世界人口の半数以上が飢餓に瀕しているのだから、早く地球の有限性を知り、グローバルに解決しなかつたら破滅である。

外国の政治家が「一つの文明が終りに近づいていることを意識しながら、生きているのは奇妙なことだ。こんな経験はローマ帝国が減んだときから、二度目のことだろう」とつぶやいたという。

最近、そのローマ帝国が減びた歴史的事実をもとに、日本がそれに似ているという興味ある論文を発表したグループさえある。

ローマの滅亡をひと言でいうなら、それは遊民化したローマ市民の「欲望の肥大化（むさぼり）」による結果である。

「労働を忘れ、消費と娯楽レジャーに明け暮れ、節度を失ったローマの人口は膨張し、無秩序な大衆社会化状況になっていった。そして市民は「パンとサーカス」のシビルミニマムをもとめ、それらが繁栄と福祉の絶頂と錯覚をしていた途端に、精神的、道徳知退廃をきたした」といわれている。

今の日本は、企業エゴ、そして労組も利己的で他人の迷惑を考えず、消費者もある程度の豊かさの中に使い捨てや浪費をくり返し、いつまでたっても心の安らぎなどえられない。そして青少年までが過保護で依頼心の強い、勝手気ままな人間になっている。

私は昨年、中国を訪問するにあたって、一体、中国では

「欲」とか「ぜいたく」の観念はどうなっているのかという興味をもち、いろいろ質問を用意していった。

しかし、上海の天山新村という一万二千世帯、五万三千人の労働者団地を參觀したとき、二DK、三DKの何軒かの家庭訪問をし、このときとばかりたずねた。家賃は収入の五％程度、所得税はない。大体が共働らぎである。

見渡すと、トランジスタラジオやミシンがおいである。

そこでどの家庭でも同じ質問をくり返した。「今、一番したいことは？」「国をよりよく建設するため、国にそして人民に奉仕することです」の答えが多かった。「今一番欲しいものは？」「家具」とか「自転車」が比較的多く、ある老人は「将来はテレビかな」と笑いながら話してくれた。

若い人からは、あまりきく機会がなかったが、最近は「カメラ」がブームになっているようであった。

いづれにしろ、低利ではあるが「貯金」を一生懸命して、一定額になったら自分の欲しいものを計画的に買うというのである。特に中国の物価は、二十数年来、安定しており、さらに公共料金などは安くなっているものさえあるという。だから安心して貯金もできる。

夜、外へでてみると、走ってくる自動車は街灯のついでに近くへくると、ライトを消して走っていく。節約のためか

と通訳にきいたら、歩行者や対向車の安全のためとのことだった。

驚いたことは、友人がホテルを出発のさい、下着を使い捨てのつもりで紙にくるんでクズ入れのところへおいてきたらしい。そして翌日、「忘れものがありました」と届けられ赤面していた。極端なようだが、ハンカチ一枚でも「不要」と書いてこない限り、忘れものとしてどこまでも追いかけてくるという。

私は、それらを見聞して以来、「欲」や「ぜいたく」についての質問をやめることにした。

中国では、至るところに「为人民服务」のスローガンがかげられている。すべては人民の利益から出発すること、少しも利己的でなく、もっぱら他人につくす精神こそ、道德的で有益な人とされている。

これこそ、仏教でいう「無我」の精神が今日の中国に生きており、人心の教育と結びついているのである。

中国仏教の理想は「利益衆生 莊嚴国土」だときいたことがある。これこそ浄土教の思想である。

思えば、わが国の法然浄土教は「偏依善導」と宣言せられ、「唐の大師」の法雨をえて開花し実を結んだのである。

浄土の教義は、穢土を去って浄土に生まれ、苦悶を離れて安樂を得るということだ。

善導大師は、当時の民衆にむかつて「先づ大衆を勧めて、願を發して、三宝に帰せしむ」と熱烈な信仰を宣言せられた。そして「道俗時衆等よ、おのおの無上の心を發せ……」と觀經疏に明示されている。人類には破滅への道しか残って

ないというこの末法の濁世こそ、阿弥陀仏の本願による浄土教が、現代を生きる全人類の救いであり、「共生の道」なのである。

—唯^デ有^チ三念仏^{ノミ}—蒙^ル三光攝^ツ— 当^ニ知^{ルベシ}本願最^モ為^スレ強^{シト}—
願わくはこの功德を以て平等一切に施し、同じく菩提心を發して安樂國に往生せん。



慈雲尊者の人間觀

増田 任雄

(大正大学総合仏教研究所員)

戦後三十年の年月が経過した。三十年と一口でいうが、おぎゃあ! と生れた子が結婚して自分の子供をもつ年である。

昨年、その三十年を空白の時間として過して来た小野田勇さんが帰還した。その先々年、矢張り二十数年の空白を過した横井庄一さんが帰還した。共に帰還というべきか、帰国というべきか、そんな印象を感じざるを得ないお二人の出現

であった。そしてよく言われたものである。あなたがたの空白の時間を埋めたものは何だったのですかと。

その一方で、物資欠乏という社会バニックが起り、それが資本主義の暴利追求として社会悪視された。又、自分のお腹を痛めた乳呑み児を食べかけたリンゴをポイとすてるかのように、ダンボール箱に詰めて放置した女性がいた。彼女達に

そうさせざるを得なかった社会背景が子供を捨てた理由として取り沙汰され出した。

一体、現代社会では禁欲だとか、生命の尊厳性という思いはなくなり出しているのであらうか。煩惱とか、罪意識とかいう考え方は過去の思いになりつつあるのであらうか。

嘗つて哲学者三木清は「現代人は自分が病氣であることを忘れてしまっているほど自分が病氣である」と大正時代の騒動とした一時期を鋭く批判したものであるが、三木清のこの批判はほこ先こそ違えど、昭和の現代で人間の悼ましい姿としてもう一度、じっくり見直すきっかけになり出していいのだろうか。

仏教は、人間の悪しき思い煩惱が何であるかを見つめようとする意味で、煩惱を重視していると考ええる。それを百八つに数えたのが百八煩惱である。百八煩惱の根本に三毒という根本煩惱がある。三毒の先ず最初に仏教は「貪欲」すなわち「貪ほり」をあげた。この貪欲は三界（欲界：姪食界、色界：浅い禅定、無色界：深い禅定）に起るとされた。だから、浅、深の禅定を妨げる貪欲は仏教が先ずどうしても見つめなければならぬ煩惱であり、そしてまた、姪食という人間の最も一般的で熾烈な欲望でもある貪欲は、矢張り人間を見つめる仏教がどうしても通らなければならない煩惱であった。

であるから、多くの先徳方が、人間の悼しさとしての一面、貪欲を深く見究わめた。それを、ここでは、生涯を律儀として不犯で通された葛城山人慈雲尊者飲光の人間観を中心に見つめてみたい。

戒律堅固なる律僧が巷間を遠ざけ、衆生を離れていくのは状況として仕方ないことである。が、幸にして慈雲尊者には「人となる道」という十善戒を在家の立場で考えた書物がある。これは「十善法語」という矢張り十善戒を詳説した法語の概略書である。だから「十善法語」に対してこの「人となる道」は略法語ともいわれている。それは仏教的人倫の書であり、心ある多くの人に読まれた。

さて、一体、人間にとって「食欲」と「性欲」とは何であろう。この最も本能的欲望は、それ自体善でもなければ、悪でもない。食欲と性欲が人間の生命的衝動であることは、今何人もこれを認めるところである。而し、人間の本能であるから、これは熾烈である。熾烈であるからまた激しくも燃える。一定のわく、即ち社会性を逸脱することもある。「男女あればその情欲あり」、慈雲は先の「人となる道」の第三不邪姪の中でそう云っている。また空海弘法大師は「秘藏宝論」という書物の巻頭で「凡夫狂醉して吾が非を悟らず。ただし姪食を念うこと、彼の羝羊の如し」と。食と性の欲を貪ほ

る人間を羝羊（ひつじ）の煙食に生きる姿に喩えた。空海のこの一文は、決して平安の昔しの歎息ではなかった。それは昭和の現代に覆いかぶさってくる永遠の歎きと聞える。

中国思想・易学の陰陽は、陰を女性、陽を男性とするが、陰陽の徳、それは自ずと男女の相をとる。

慈雲は更にいう。「男女の会遇宿縁定り来て、現縁成就するは人倫のつねなり」と、男女という現実を慈雲は凝視する。そして、その現実を壊すことなく、そこから、人道を引き出そうとする。それが現縁成就するは人倫の常なりなのである。人は縁あって結ばれる。その縁しを体験することは人の人たる由縁であり、喜びである。又時に悲しみなのでもある。

空海も、先の秘蔵宝鑑の中で「愚童持斉」ということばで、人倫を愚童が行儀よくすることにたとえている。

が、一般に道徳とか倫理とかいう概念には、歴史的、社会的限界の如きが付き纏う。たとえば、かつて武家社会の「腹切り」は武士道という大義に於て武士階級美風とされ、徳目とされた。が、近時、作家の三島由起夫はそのかつての武士の「徳目」を現代の「徳目」にせんとした。その行為は、少くとも幾人かの人間を除いて殆んど現代社会では受け容れられなくなっていた。明らかに武家社会は現代に存続していな

い道徳は社会制度によってその規準が動くのである。それは逆にその徳目の社会的限界となる。

それは慈雲においては次のように解釈されている。「他国にはひとの国の礼あり。我邦はわが国の礼あり……もしわが国尽て他土の礼をいざなう者は念のはだしきなり。仏戒はこの等語ならず」と。

すなわち道徳・倫理は国家社会によって解釈がちがうのである。が、そのような道徳・倫理の限界を超えるもの、それが慈雲の世界では仏戒すなわち密教の三昧耶戒なのである。ここに人倫という現実世界を変らざる絶対者の世界へ誘っていく慈雲の仏者としての現実肯定の立場を見つめることが出来る。それはまた、空海の世界に於ても「嬰童無畏心」の例で歴史的、文化的に流動的な概念となっている。それは「外道天に生じて、しばらく蘇息を得、かの嬰兒と犢子の母に随うが如し」と永遠の世界に気付き出す。

さて、このようにして、慈雲に於ても、空海に於ても、彼らをとりまく現実の世界は、貪欲の熾烈は一面、煙と食の掉ましき姿であったのであるが、彼らはその現実世界を遠ざけることなく、一つの前程とした。それはあたかも資本主義経済があつてはじめて社会主義革命が生れ出る資本主義という大前程、この公式に等しき彼らの現実肯定の立場であつた。

慈雲は先の第三不邪淫の章の最初に、先ず「仏身を知らんと欲せば、衆生業相の中に見よ。解脱法を知らんと欲せば、此生死界の中に求めよ、……此人情（男女の情欲）ある者、道をつたうるの器なり」と云って、この欲界の中で淫食に動く男女の姿こそ、それが法を伝へる器であると解する。その根拠は「乃至欲に在りて清浄なるは三摩地門なり」といって、観音の三摩地門、すなわち身口意という人間行為を深い思索禪定で観音菩薩の世界に集中させることである。

ここで思い出されるのが観音経で知られる法華経の普門品第二十五である。そこでは多くの定型句が見られる。それは「若し衆背て観世音菩薩の御名を恭敬せば無量百千万億の苦悩たちどころに消滅す」というのである。それは「苦からの解脱」ということで観音の「功德」となる。例えば、具体的に一商主が宝物を三千国土に満つる怨賊に取られそうになっても一人が観音の御名を憶念すればその「宝は無畏にて施さる」という。また淫欲有るも南無観世音と唱うれば淫欲を離たれるという。また女性が男子を求め南無観世音と唱うれば福德智慧の男子が、女子を求めれば端正有相の女子が求められるという。観音経の称名の功德は計り知れないものがある。その内容は現代社会の恥部をえぐるには充分すぎるほど内容に遜色がない。

先の慈雲の「観音菩薩の三摩地門」は慈雲をとりまく現実の悼ましさを、観音の世界に直結させる。その欲望の世界は、観世音菩薩の境地に於て「清浄」となるのである。

ここに人間の最も衝動的欲望貪欲（淫食）を慈雲の目を通して、現実的に見つめたのである。それは慈雲にそしややされて人倫という限界あるモラルとなった。そして尚それは南無観世音という宗教意識で、永遠の原理へ結び付いていく。

この小論は、現代世相に映じた新しいモラルということに対していささか考えたものである。

ドイツの社会主義者マックスウェーバーは「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」の中で、資本主義の勃興が「職業の責務をはたすことは、道徳的に話されているばかりでなく、それは神から命令されているのである」という神からの「召命」であり、それは「現実にとどのように作用したか」ということで宗教の社会性を資本主義的経済行為に見た。ウェーバーの世界でプロテスタンティズムの倫理は資本主義的経済モラルを引き出した。

そのような意味で、たとえばこうした南無観世音の信仰姿勢が、現在日本の資本主義経済にどのように作用し、また関わって来るのであろうか。



に	こ
聞	法
く	語

法然上人の人と生活(五)

想い出の人間像

宝田正道

法然上人をめぐる人々については、すでに本誌上でいろいろな先生方が、随時取上げておられる。一番まとまって毎月連載されたのは、伊藤唯真助教の「念仏・人と歴史」(四十八年一月号・七月号)である。その頃の読者には、また同じような記述の繰返しではないか、という印象を与えるかもしれないことを恐れるので、ここに書くことは憚りたいと思ったのであるが、上人の人と生活を語るうえには、どうしても避けて通ることができない。そこで重複(あるいは引用)という非難をあえて覚悟で、筆を進めることを、最初に断っておく。ただし、この稿は、法語を中心とした感想が主目的であるから、同一人物を語るにしても、いきおい、法語にあらわした人間像を中心とする。その点でご了承願いたい。

上人の接しられた周辺の人々を、大ざっぱに分類すれば、

直接に学問的な教えを受けた観覺、源光、皇円、叡空ら四人の師匠群と、南都遊学や大原談義などで顔を合せた藏俊、寛雅、顕真、重源ら、他宗でありながら上人の説に共感を寄せた碩学たちと、高倉天皇、宜秋門院、九条兼実その他の宮廷貴族一門の人々と、『七箇条起請文』に署名した信空以下百九十人に及ぶ、いわゆる門弟たち、熊谷直実、津戸三郎らの武士階級、それに耳四郎や阿波之介、あるいは室津の遊女などを含む、名もなき一般庶民の群れその他、ということになるうかと思う。

これらの多くの人々を、一概に上人門徒といってしまうと多少の語弊がある。たとえば、重源などは上人自身「同行」と呼ばれているから、直ちに門弟の列に加えるわけにはゆかないだろう。むしろ、いわゆる「ファン」という程度に解し

たほうが近いかもしれない。

いずれにせよ、上人をめぐるこれら各界の多彩な顔ぶれの中から、上人が法語や消息のうえで、特に胸中に残る人物として関心を寄せられたのは、だれであろうか。兼実や聖光、隆寛、証空、聖覚、源智など、付法の弟子はしばらくおいで、まず考えられるのは、遊蓮房円照である。次の法語は、上人のいつわらざる心境をのぞかせた一齣であろう。

浄土の法門と、遊蓮房とにあへるこそ、人界に生をうけたる、思ひ出にては侍れ。

〔勅伝〕四十四

まことに、遊蓮房との出会いこそ、上人にとって一生の想い出であった。その事情はこうである。

遊蓮房は、信濃守是憲といい、平治の乱で殺された、当代一流の学者兼政治家藤原通憲（少納言入道信西）の子として保延五年（一一三九）に生れたが、病弱で、治承元年（一一七七）三十九歳を一期に夭逝した。ちようど法然上人が立教開宗されてから二年目のことである。

法然上人の孫弟子に当る敬西房信瑞が著わした『明義進行集』巻二によると、遊蓮房は『コトハライタシテモノマウサ

ルコトハナカリキ。ソノコトハサウラウナト人申ス時ハ、ウナツカレシハカリナリ」とあり、つまり非常に無口な人であった。そして「身ハホソ／＼トシテカハニキホトニ、甲斐ナケナル嬰孩第一ノ人ナリケリ」とも云われている。いかにも小柄でほっそりした青白いインテリといった感じである。彼は二十一歳で出家して西山の広谷に止住し、後善峰に移ってそこで亡くなったが、高声念仏は必ず現徳を得る行なりと、善導大師の行実にあやかって三寸火舎に香を盛り、その香の燃えつきるまで合掌して毎日三時高声念仏行を続けた。その間、「靈証ヲエタル事度々」であった。はじめ法華經を覚えたが、念仏三昧の後は「經一卷モ書籍一卷モミニ持セ」ず、「一向念仏ハカリ」であったという。日常、一幅半の極楽曼陀羅を自ら首にかけて拝み、時をたがえず極楽六時讃を誦して念仏を申したので、藤原一族の者はこそって彼を「仏ノ如シ」と尊び敬った。

法然上人は、承安五年（一一七五）、比叡山黒谷別所から下りてすぐ西山広谷に足を運ばれたが、これは遊蓮房のごとく、善導流の高声念仏を修して度々靈証を得ている、いわば若き先達（彼は上人より六歳若かった）に会って、善導の『観經疏』により発見した一心専念弥陀名号、凡夫入報土の道を確認し、立教開宗の生きた証人をつかみたかったからに違いない。

い。上人は遊蓮房のところに同居して二年ほどの短い道交ではあったが、互いに感応しあい、彼の臨終に立会って、彼が九念まで唱えたところをいま一念と励まし、十念に満たして無事往生の素懷をとげさせた、ということである。上人にとっては、まことに因縁の深い、想い出の人というべきである。

ところで、因縁といえは不思議なもので、この遊蓮房の肉弟に当るのが、高野の僧都明遍である。明遍は笠置の解脱房貞慶や安居院の聖覚法印とも俗縁のつながりをもつ。彼は康治元年（一一四二）に生れ、一時東大寺の光明山別所に籠居したが、出離の志深く、法然上人の大原問答を聴聞し、建久六年（一一九五）高野山に隱遁、蓮華谷の聖といわれた。貞応三年（一二三三）、八十三歳で亡くなったが、善光寺詣りの途次、小松殿におられた法然上人を訪ねて、「念仏のとき心が散乱するのをどうしたらいいでしょう」という疑問を提出した。そのとき、上人は、「心が散っても仏願に乗じて往生できます。所詮おおらかに申すのが、第一ことです」と答えられたが、その対談後の上人の述懐が次の法語である。

心をしづめ、妄念おこさずして念仏せんとおもはんは、むまれつきの目鼻をとりはなち

て、念仏せんとおもはんがごとし。あなことごとし。

（勅伝十六）

まことに巧みな、おもしろい譬喩である。この言葉は『一言芳談』にも出ているが、当時の聖道門の仏教徒にとって、妄念を起さないで念仏する、などということは考えられないことであつた。それを法然上人は、仏の本願力に乗ずるといふ立場から、ズバリと散心のまま念仏すればよいのだ、と答えられたのだから、明遍が驚き、信伏したのも無理がない。いわば、生れつきの目鼻立ちをとる、というような人間として不可能なことは強制しないで、人間のありのまま申せばよい、としたところに易行念仏の真髓が光っているのである。

明遍は、空阿弥陀仏と号し、上人滅後はその遺骨の一部をもらいうけて一生涯首にかけ、また上人自筆の『三昧発得記』を源智から見せてもらって感涙にむせんたという。

ところで、明遍のことを「有智の空阿弥陀仏」というが、法然上人門下には、もう一人の空阿弥陀仏がいた。これを「無智の空阿弥陀仏」あるいは「法性寺の空阿弥陀仏」と呼んで区別している。次の法語は「無智の空阿弥陀仏」に対する上人の感懷である。

源空は智徳をもて人を化するなを不足なり。
法性寺の空阿弥陀仏は愚痴なれども、念仏の
大先達としてあまねく化導ひろし。

〔勅伝〕四十八

この空阿弥陀仏は、もと延暦寺の僧であったが、後、法然上人に会ってからは、一向専修の行者となり、経も読まず、礼讃も行ぜず、称名のほかは他につとめなく、常に在所を定めず、別の寝所なく、沐浴便利のほかは衣も脱がなかった。まるで念仏一行の風来坊みたいな存在であった。常に四十八人の能声をととのえて一日七日の念仏を勤行し、所々の道場、至らざるところがなかったという。だから、行徳顕われて人々がこの聖を尊んだのであるが、上人もこれを認めて「あまねく化導ひろし」と褒められたのである。

彼がなぜ「無智」といわれたか、理由は明らかでないが、信空はこれを「多念ノ純本、専修ノ棟梁」と賞したくらいであるから、恐らく法然上人のいわゆる「愚痴」に徹した意味でこう呼ばれたものであろう。いつも妙音を奏でる風鈴を愛玩し、極楽の七重宝樹、八功德池の風波の音と聞いたという。また、「文讃」という一種の和讃を念仏の助音として用

いたり、四天王寺の西門内外の念仏を勧めたりしたのは、いずれもこの聖の始めたことである、と伝えられている（勅伝「四十八」）。嘉禄三年（一二二七）隆寛や幸西とともに流罪に処せられ、薩摩に流されたが、翌安貞二年（一二二八）没した。七十四歳であった。上人滅後一六年、明遍より遅れること四年である。

法然上人の胸に去来した想い出の人々はまだ他にも沢山あるが、残念ながら紙数が尽きて三人で終ってしまった。いずれ別の機会をとらえて、もう少し取上げるつもりである。中途半端を諒とせられたい。

新刊予約募集中

〈限定三百部〉

『中国文化史蹟』

全十二巻増補一巻

常盤大定・関野貞／竹島卓一・島田正郎

常盤・関野両博士が明治三十九年以来前後八回の長期にわたって中国全土をが訪して、蒐集された膨大な資料を整理した一大文化財図歴の復刻版。

B4判 各巻百二十頁前後

配本払特価 三三〇〇〇円

録時払特価 二二〇〇〇〇円

法蔵館刊

四季の書



癸丑暮春蘭亭曲水の宴 〱其二〽

林 錦 洞

(書道家)

こうして王羲之の蘭亭序という名筆は子々孫々に伝承され二百五十年を経て唐の時代になりました。唐の太宗皇帝は文武の道を兼ね名君として唐三百年の基を作られた皇帝ですが、書にも堪能で、晋祠銘などの代表的傑作があり、勿論王羲之の信奉者で、凡そ二千三百紙という羲之の書を集め独り研究と蒐集に耽っていました。

然し羲之の傑作と言はれ、幻の名蹟と言はれる蘭亭序は見ることには愚か手することは出来ず、八方手を尽してはいないが心中おだやかではなかった。その頃蘭亭序は羲之七代の孫智永の手に伝存されていた。彼も王氏の一族であるが、仏門に入ったものも多く、智永も兄の孝賢と共に出家している。やはり会稽の生れで呉興の永欣寺に入り三十年。この間王家

の伝統を受けて書名も高く、この後長安の西明寺にも住したと言はれるが書の研鑽に努め真草千字文は作表仏として今も珍重されている。随代屈指の書家で当時門前市をなし為に門扉に穴があいたと言う。この穴を鉄で蔽ったところから「鉄門限」という名称も出た。その智永も生卒年を明にしないが既に百歳に近かったようである。臨終に臨んで弟子の弁才に蘭亭を与えた。太宗は蘭亭が弁才の手許にあると聞き勅命を以て宮中に呼び、礼を尽して何とか手中にせんものとした。弁才もさる者「見たことはあるが先常歿して後は何処にあるものやら一向にわかりません」と柳に風の返事である。三度も太宗は呼び出しをかけたが頑として応じない、「蘭亭はかねて朕の見たいと思っているもので、日夜その事で頭が一杯

だ。弁才はもう年だし持っても仕方あるまい、誰が計略をめぐらして召し上げて来るものはないか」と侍医に問いかけた。

この時白羽の矢が立ったのは監察御史という。官吏の善悪、刊罰などの檢察を職とする蕭翼は太宗から羲之の書帖数枚を借り此を懐中にして衣服を変え書生の姿となって、ぶらりと弁才の寺にやって来た。数日滞在し頃合をみて互に酒を汲み交はすまでに、なじみとなった。偶々書の話となり、かねて用意してある羲之の書を弁才に見せた。蘭亭を手中にする弁才には蕭翼が見せたものなど問題にしない。その素振りから破信を深めた蕭翼は「蘭亭ほどの名蹟が今はもうある筈がない。あっても偽作か鈎本だ」とけしかける。弁才は「むき」になって「禪師が生前大切にしていたもので臨終に私に与えたものだから間違いない。なんならお目にかけよう」と本音を吐いてしまう。翌日天井裏から蘭亭を出して見せ、それから机上において蕭翼から借りた羲之の書を見比べたり臨書したりするようになった。蕭翼は弁才の留守に寺を訪ね、蘭亭と太宗から借りた羲之の書と共に手中にして引き上げた。蕭翼は監察御史の威儀を整え弁才を呼びつけ、勅命によって蘭亭をとり来たことを告げた。彼は茫然自失、爾来食も進まず一年後に世を去ったと言う。蕭翼は官位も進み思

賞にあづかったことは言うまでもない。

宿望を果たした太宗皇帝は誇らしげに宮中の搨書人という書き手に命じて蘭亭を複製、更に唐代著名書家、虞世南、歐陽詢、褚遂良外陸東之に臨本を作らせたと言う。太宗は熱愛のあまり没後その御陵である昭陵に羲之の書のすべてを殉葬することとなる。

こうして羲之の真蹟は永久に見ることが出来なくなったのである。従って太宗生前に歐陽詢の臨したものを石に刻したものや初め虞世南褚遂良の臨本・更には宋元明清代にわたって臨書された搨本刻本などを通じて羲之の真容を想像するしかないわけである。羲之の書としては後世学習觀賞の資として数多いものがあるが、蘭亭の外にも刻本の十七帖・聖教序・興福寺斷碑、また鈎本では国宝の衷乱・孔待中・哀愍・樂毅論、黃庭經などがある。

蘭亭曲水の宴はこうして中国日本を通じて古くから語りつがれて来た。この宴を画題として画かれたものも多く日本でも池大雅・鉄斎・蕉村などのものが有名である。硯や墨にもこの図を刻したものが多い。桜花咲き乱れる季節、千六百二十年前のこの曲水の宴もさこそと偲ぶすがを、本稿によって思い浮べて頂ければ何よりである。



心の履歴書 △三▽

川内 知光

(京都市西賀茂西方寺住職)

都会は砂漠である

某日市バスに乘りました。満員です。私の下車する停留所まで五十分位はかかります。老人身傷車用の席が四人分設けてありますが若い人が平然と座っている。之は何処にもある風景らしいです。

私は座席にいる人を見廻して、どの人が一番早く下車するかが大体三分の二位は当るのです。

私はこの人と思った人が七、八分して下車の用意を始めました。ところがその隣りに座っていた老婆が、前の方に立っている女の人に「あなた空いた、早くここに掛けなさい」と言って呼びました。「しまった」と思った時、私のすぐ隣に立っていた三十代の奥さん凡の人が、「この方は腰を曲げて杖について先から立っていられる。お気の毒だ誰か替ってあげる人が無いかと思っていたのです。「このお爺さんに掛けてさせてあげて下さい」と言って下さったので、隣席のお婆さんと掛けようとした女の人と奥さんとに「有難うございました。助かりました」と言って楽な状態になったのです。言って下さった奥さんに「私はこのように体が不自由ですからだ

と思いますが、座席を見廻してどの人が一番早く下車せられたかが大体三人のうち二人位は分るのです」「どうしてそのようなことが分るのですか」「之は私にも何故か分らないのです、不思議に思っているのです」と言っただ話をしていたのですが「お名刺を預けませんか」と言われるので差上げましたら、「お寺さんですね、一度お訪ねしてよろしいでしょうか」と言われるので「私は今隠居しましてお寺の事は一切しておりませんので時間を持し余している方です。訪問客は大歓迎です。その前に電話をして下さい」と言っただけで分れました。

それから一カ月余もしてから奥さんが訪ねて来られました。

「妾は主人も良い人だし、主人の母も理解があり、尋常小學校に行っている子供も二人共に普通以上の成績だし、私は人様から比べましたら、幸福であると思っただけです」

「ところがどうした訳か一カ月か二カ月に一回位ノイローゼみたいになってどうにもこうにもならない状態になるのです。その時には近所に親しい友達がいまして一、二時間何だかまとまりの無い話をしているうちに、その嫌な気分が晴れて、以前の良き状態に戻るのです。ところがその友達の主人が名古屋に転勤になって、私のノイローゼを直して下さる人

が無くなってしまつて困つていたのですが、空く座席が分ると言われたのがお寺さんであることが分り、友人の替りをして下さるかも知れないと思つてお訪ねしたのです。勝手なことでも申訳ありません」

「私は老人だし男でありあなたの気分を更える自信はないように思いますが、時間つぶしに色々とお話をさせて頂きますよう」

自分の精神方面の事については余り語らずに私の経歴のことばかり聞かれるのですから、宗教大学（現大正大学）を出て青年団長をしたり、京都市役所に勤めて数年して中央職業紹介所長になり、之が国営となり官吏となつて四年つとめてやめたこと、役所時代から民生児童委員をやつて昭和四十一年藍綬褒章を頂いたり、又勲五等を授けられたりしたこと、旅行が好きで、上海、南京、杭州からインド、ネパール、タイ、又台湾、韓国を訪問したり、インドネシアに行つて胃潰瘍をやりシンガポールに十八日間入院して、帰国した話、その他本心の履歴書者を書いてあることの一部を話したり、雑誌大法輪昨年九月号に書いた「自殺志望青年との対話」を差上げてその話をしたりしてしまつてその奥さんが何故一カ月位に一回ノイローゼになれるかについて聞き出す期会もなく、一時間半ばかりして、これで元の状態になりました

た。有難うございます。又おかしくなったら伺いますと言つて帰って行かれました」

私は仏教大学のH教授を訪ねてみました。H教授は調べてみないと分りませんが、ノイローゼのように思われます。性格テストをするとか投影法によるとか、心理学の面と精神医学の面からの検査も必要だし、妊娠、遺伝その他の究明も要りますし、一週間以上検査にかかりますが、あなたに会って直つたと言うのでしたら、それで良いではありませんか。今の大学生に五月ボケと言うのがあります。一生懸命大学入学のために勉強してやっと入学出来た。ところが大学に入つたものの俺は何の為に大学に入つたのか分らない。そして一カ月程経つた五月頃になつて五月ボケになるのが多いと言うことです。

私は幸福だと思ふ平凡な日々の生活の中に何かに充たす戦戦が無い、生活にハリが無い、大都会に砂漠だと言われる、隣り人と挨拶もしない生活、従つて発散する期会が無い。こうした環境がこの奥さんのようにしてしまつたのではないかと思われまふ。

大体人間は之で満足だと思ふことがあるのでしようか。ほんとうに満足と思える人は悟りを開いた坊さん、居士、信者だけではないでしようか。私は死ぬ迄修業だと思つていま

す。

次に又奥さんが必ず訪ねて来られると思います。その時にはこう言つたことに触れて話してみようとか今から待ちかまえているのです。そして此項は結論らしきものが出たのか出ないのか分りませんが、もっと深いものが出て来ましたら改めて報告させて頂きます。

郷土愛

青年団運動の盛だつた頃でした。

私は宗教大学を卒業して、西方寺に帰つて来まして、大宮村青年団長の役を持たされました。それから郡制が廃止になつてから、今迄愛宕郡長が愛宕郡聯合青年団長だつたのを私が聯合青年団長を持たされました。当時の愛宕郡長は私より二歳年長の若き俳名蓬矢、有名な矢野兼三氏でした。

その頃は対抗陸上競技が盛んでありまして愛宕郡も十二カ村の対抗がありました。京都府も一市（京都市）十八郡の対抗競技がありました。人口の二分の一を占める京都市が優勝するに定まつていますので、京都市、山城、丹後の四団

体にて争うことになり、山城八郡で山城山城青年団連盟を作り第一回の団長は矢野兼三氏でしたが、郡制廃止によって、私が愛宕郡からその団長を引受けることになりました時の話です。

その四団体の競技大会に出場する予選のための大会を開かねばならなかったのですが、その予選大会は大低京都府立植物園運動場が定例になっていたのですが、相楽郡から木津川畔に郡の運動場を造ったからその開場を記念して山城八郡の運動会をやって欲しいとの要望がありました。

その頃の運動会をよくもめることがあったのですが、殊に相楽郡は特にめごとが年中行事になっているようで、奈良の春日野グラウンドでやった時、もめて審判長だったAという柔道四段の人がキコリの垣をくぐって逃げたと言うことを聞いておりますので、私も大分考えたのですが、結局木津グラウンドを使うことになったのですが、私は条件をつけたのです。その一つは競技を敏速に進めて早く終了すること（夕方になると一杯飲んだ連中等が騒いで殺気だってくる）、今一つはもめた場合木津町と相楽郡とが責任をもつこととしたのです。

ところが予想通り競技も順調に進んで終了に近づいた頃、原因はあったのですが、最後の八百米リレーの前には八本あ

りコースのうち四本位まで群集がおしかけ、団長らの天幕の周囲は数百人の群集にとり囲まれてあわただしい空気となりました。

私は恥目して腕を組んで十分位か、じっと椅子に腰かけていましたが、やおら椅子の上に立ち上って一つの演説を試みました。

「諸君に色々と言いたことがあると思いますが、主催者の一言を心して聞いて頂きたい。先づ木津町の皆さん、同時に相楽郡の皆さんに御願います。今日の山城八郡の運動会はこの整った相楽郡の運道場の開場式を兼ねた祝福すべき催しであります。この目出度い開場式に皿をもって色どられることがあっては洵に恐るべきことだと思えます。汚点を残すことなく歴史上平穏な式典にして終了するように努力して頂きたい。次に他の七郡の諸君に御願います。諸君はこの目出度い開場式に御招きをうけて楽しい青年らしき一日を送らして頂いたことを感謝しようではありませんか。それでどうかこの目出度い祝儀を、清潔なる開場式らしい祝典に終らして下さることを御願いたします。それでは最後の八百米リレーに移り、優勝旗授与といたしますから、場内整理係の指示に従って場内を整理しますから御願いたします」と言って悪なく終了することができました。



念佛ひじり三国志

(三)

——法然さめぐる人々

寺内大吉

挿絵 松濤達文画

一

八風峠を越えると、伊勢路へはいる。近江からの道が、樹林の山肌を見えがくれに巻いていた。八風街道と呼ばれる重要なルートであった。

重要なルート——

平氏にとってである。軍事目的のために、である。

平氏の戦鬭資源は伊勢にあった。京で一朝ことあるたびに荘園の平氏武士団はこの八風街道を走るのであった。

数日来、街道で人馬の動きが活発になった。また都で何かおこったな。

と、里人は不安な眼で見送る。

大きな戦さにもなつて見よ。たちまち理不尽な徴発が開始されるのである。里人の食や財産がおびやかされる。殺気立った兵士たちの眼に触れる女房や娘も危険になる。かねて用意してある山小屋や洞窟にこれらを秘匿してしまわねばならない。

街道をものものしく往還する武士団。

それに添った間道で、ひっそりと動く里人たち。

中世の戦鬭は、いつもこんな形態が始動の兆しとなる。

八風峠の近江側から登坂路。そのとば口に「政所」(まんどころ)と呼ばれる集落があった。

ふだんは平和な集落だが、ことが発生すると集落全体

が平氏の軍事基地に変貌する。集落の中心に立つ正源院という古寺が陣屋になるのである。

物資が集積される。軍馬が群衆すると里人は此処へ動員されて飯炊きをさせられる。通過してゆく兵士たちに馬と兵糧を供給するのである。

正源院は同時にこのルート全体を確保する目付けどころ、つまり臨時の関所にもなる。旅人は厳重にチェックされる。謀者の動きを封ずるためだった。

政所の集落まであと二里。愛知川の流れが八風街道をさえぎる。そこまできた人馬は河原へおり、流れを渡らねばならない。雨でもふりつづくと、その行軍は著るしく渋滞する。

幸い今日は晴れていた。今しも数十騎の武士団が、それぞれ馬をひいて渡っているところだ。水深は膝小僧の上までくらいある。この深さだと馬はひいてやる方が安全だ。

「九郎どのはこれから何処へゆかれる？」

堤のかげで、川渡りをしている武士の群れを眺めやりながら重源は訊いた。

「はい、伊勢へ抜け、伊良子に渡って、それから東海道を下って……」

前号のあらすじ

三論の学匠の明遍のまわりにも世の数奇な運命が徘徊していた。京における宿舎光堂の鐘つき男五郎次老人によって、ふと知り合った源義経は早くも事件の渦中の人となっていた。その夜、義経と五郎次の二人の馬上の人は、明遍の心配をよそに六波羅の平家屋敷の焼き打ちという暴挙に出た。むろんこの盲動は見事に失敗するが、運よく追手から逃れた義経をよそに、五郎次とその妻菊女そして狂女桔梗姫の三人は平維盛一党の虜となってしまう。そして、火事見舞いを口実に維盛を訪れた明遍の前で、しかも平相国清盛の同座するその前で、三人の捕われ者は、清盛の命によって無残な火刑に処せられることになる。異常な光景が、不思議な魔性をともなうて、容赦なく明遍の体と心を襲うのであった。

遠く奥州路帰るといふ。

俊乗房重源と九郎義経との出会いは、つい今しがたのことであった。

重源は改修の終った伊勢の寺へ開眼供養におもむくべく東大寺の僧六名ほどを引きつれて八風街道を歩いていった。後方から馬を走らせてきた若者を、

「九郎どの、待たれよ」

と呼び止めたのである。

街道の様子がおかしい。このまま走り続けると、どんな難に遇うかも知れない。

九郎義経の身分が身分だけに重源は老婆心をおこしたのである。

旅馴れた重源には匂いで、それがわかった。人馬の動きで、街道のゆく手に何が待ちまかえているかが想像できた。

茨川の堤のかげへ九郎義経を誘いこみ、供の者には經具を肩からおろさせ、小休止したのである。

「九郎どの、京で何をした？」

「何をとは——」

「六波羅に怪火が発したそうだな。京を抜けてくるとき、噂で聞いたぞ」

「ははあ……」

「おぬし、無関係か」

「……」

「どちらにしろそのような恰好で旅を続けるのは危険だ。いずれ伊勢路までは街道の各所に関所が設けられているはずだ」

すでに八風街道が戦時体勢化していると、重源は言うのである。

「どうすればよろしいのでしょうか」

若者は無表情で訊き返す。

関所の二つや三つ、蹴破ってでも駆け抜けて見せる。

という気概と自身が全身に満ちていた。重源の提案を無心で聞こう、という表情だ。

「わしの供に加われ」

「頭はすでに——」

と、先日宇治へ出かけたとき、剃りあげた頭頂を撫でまわしてみせた。

「その狩衣がいかぬ。山伏になるのだ」

「山伏——」

「装束はそろっておる。これ、浮之坊」

と、重源は侍者を呼び、道具箱の中から山伏の装束を取り出させた。これは一行がかからおもむく寺の裏山に三土権現があり、その社殿も改築したので、開眼式用に準備してきたものであった。

九郎義経はたちまち山伏姿に変装した。

「あれは？」

と林の中につないだ黒鹿毛を、未練げに見やった。

「あのまま置いておけばいい。里人の誰かが使う」

そのころ、川面では伊勢平氏の武士団が全員源氏終え

<愛馬との別れ>



て、近江路の彼方へ姿をかき消した。

ころ合いを見はからな、重源の一行は茨川を渡って八風街道へ出た。

またしても後続の騎馬隊が峠の方から走ってきた。

「京で何があったのかな」

重源は騎馬隊とすれ違うとき、先頭の隊長らしい武士に声をかけた。

「遷都です」

と、短い言葉を残して武士は去った。

「遷都……やはり平相国は福原へうつるのか」

平清盛が長袖の公卿どもが支配する京都を去って、その軍事上の拠点である摂津福原へ移動するであろうことは、かねてから噂されていたことであった。それを「遷都」と呼ぶからには、天皇以下の百官にも行動を共にするよう強行したに違いない。だからこそ伊勢平氏武士団の動員であった。

しかし九郎義経の頭脳はもっと単純にこの遷都を受け止めている。

「蜂起のための逃亡と違いますか」

「蜂起とは何か」

重源はじろりと若者を見やった。

「六波羅の怪火で」

反平家の分子がいつせいに蜂起し、都は今や戦乱の巷と化しつつある。

九郎義経はそう考えたい。おのれの放火が、そのきっかけになった。と評価したのである。

「やはりおぬしだったのか」

若者の心底を見ぬいて、俊乗房重源は笑った。

「重源どの。わたしはこれから京へ引き戻します」

「何のために」

「蜂起があったからには……」

若い火は燃えている。その戦乱の巷を駆けめぐりたい。

「馬鹿を申せ。そんな蜂起はどこにもあるわけがない」

かりに六波羅の怪火が福原遷都のきっかけにはなり得てもすでにそれは清盛積年の構想で予定の行動だったはずだ。もっとスケールの大きな政治、軍事上の課題であって、一戸の怪火だけにおびえて、清盛は京都を逃げ出したのではないのである。

それと、現時点で源家の残党による蜂起など絶対にあり得ない、と重源が持つ情報源は分析していた。

逆に清盛はその怪火を利用したのだ、と判断を下したのである。

二

政所の正源院。平氏の陣屋まできて、俊乗房重源の一行はきびしい検問に遇うどころか、望外な好遇を受けた。その守備隊長が重源の旧知の間がらだったからである。

「上人にお目にかかれるのは何年ぶりのことでしょうか」

武内足助という名の近江武士はなつかしげに声をかけてきた。

「さよう、あれは仁安二年の春四月であつた。かれこれ十年になるだろう」

「久々でゆっくりお話もうけたまわりたく存じます。今宵は是非こちらで」

一泊して欲しい、と足助は重源らを正源院の本坊へみちびいた。

その仁安二年の春四月、重源は宗国へ向けて旅立った。この折、渡船する博多までの旅を警固してくれたのが竹内足助である。当時は北面の武士だった。

思い出話はじきに現実の話題へ移行していった。清盛

の福原遷都である。

清盛は六波羅に住んでいた一族郎党を福原へ連れ去り、その後詰めとして伊勢平氏の武士団を六波羅に入れる構想であった。そのための動員である。

「やはり天下の政治を院の御所から切り離すのがねらいであろうか」

あの手この手で清盛を弄絡しようとする後白河法皇とその側近たち。

高倉帝を完全に掌中にした清盛はそのわずらわしさから逃がれたのであった。

「政事のことはよく存じませぬが、一昨日の使者によると、京では今にも兵乱がおこるとか」

重源を信頼しきっている竹内足助は、機密事項まで洩らしてくれた。

「兵乱がな」

「源家義朝の遺児に九郎義経と申す者がおります」

「九郎義経か」

重源は何喰わぬ顔で反芻する。

その九郎義経は、経箱道具箱を並べたすぐ向う側で休んでいる。おそらく聞き耳を立てていることであろう。

「その九郎が先日、軍勢を引きつれて六波羅を襲撃した

とのこと。遷都が早急になったのは、そのためでございます」

清盛は後白河法皇の手前、この小さな放火事件を巧みに利用したな、と重源は自分の判断が間違っていないかったことに満足した。

「どのくらい軍勢で襲ったのか」

「さそれは……何でも源家九郎義経ぞ、と呼ばわりながら六波羅屋敷に火を放ってまわったそうでございます」

「また派手な振舞に出たものだ」

重源は荷の向う側へちらりと視線を流した。

「九郎義経をからめ捕れという指令もこちらへ届いております」

「それで、おぬしはその顔を見知っているのか」

「顔どころか、名前すら初めて耳に致します」

「うむ。顔も知らず、どうやってからめ捕るつもりかな」

「西からきた怪しい者はすべて此処で押さへ、折檻するしか方法はございませぬ。すでに八名ばかり」

「押さえてあるのか」

「はい。上人さまは九郎義経の顔をご存じで」

「うむ。鞍馬で童子をしておったところ、両度ほど見かけたことがある」

「それは調法。ひとつ捕らえた者の首実検をお願い致しますようか」

「容易いことだ」

ぬけぬけと俊乗房重源は、竹内足助について本坊を出てゆくのである。

荷箱のかげで九郎義経はあきれた。何というふてぶてしい僧であらうか。

守備隊長の口から自分の名が洩れたとき、義経は瞬間死を決意した。重源が気弱におれば、たちまち窮地におち入る。

しかしまだ警戒をゆるめることはできない。重源は此処を去ってからあの隊長に自分のことを密告するかも知れないからである。

じきに重源の声が本坊へ戻ってきた。

「みんな違うわい。どこの馬の骨とも知れぬ連中ばかりだ」

「違いますか」

「気の毒に放ってやるがいい、足助どの。九郎義経と申す者はな、左馬頭義朝の遺児であるぞ」

「いかにも」

「亡き頭の殿はな、美目秀麗な武士（もののふ）であっ

た。母の常盤も平相国の心を溶かしたほどの美女だ。二人の間にできた九郎義経が、あのような悪たれ面である道理がないではないか」

「いかにも」

「それとな、六波羅を九郎が襲撃したという知らせ自体が怪しい。そんな軍勢を鞍馬の童子に動員できるわけがない。これは平相国の流言だ」

「流言——」

「福原遷都を強行するための流言にすぎない」

重源の論理は筋がとおっていた。それと、政治的なふくみを持つ話よりは田舎武士に説得力があった。竹内足助は重源の提言をいれて、逮捕した旅人どもを即産に釈放してしまった。

夕餉の席には竹内足助以下の高級武士たちが陪食した。山里からかき集めた鳥肉や野菜と美味なものが並んだ。酒もふんだんにあった。

もちろん重源ら東大寺の一行は酒肉に手をつけなかった。

武士の間で酒気がひろがり、今様を歌ったり、舞いをさす者が出た。

「こ無理な注文とは存するが」

と竹内足助は僧侶側からの隠くし芸を求めた。

「義之坊」

と、重源はいちばん末座に控える九郎義経の俄か名前を呼んだ。

「はい」

「一献舞ってさしあげろ」

これには義経も狼狽する。舞いの心得なぞ全くないのだ。

「山伏の天狗踊りでよいではないか」

「天狗踊りで……ございますか」

義経はハツとなった。

鞍馬にいたころ、武技をみがくため義経はひとり山野を駆けめぐった。高い木の枝に飛びついたり、崖から飛びおりたりして訓練をした。

九郎どのは天狗を相手に修業しておられる。

と、鞍馬寺の僧たちがささやくのを、義経自身も知っていた。

俊乗房重源はちゃんとそのことを記憶しているのだ。

天狗踊りなどと口にしたのがその証固である。

義経は出たらめな所作で本坊の座敷を飛んだりねたりする荒っぽい舞いを演じた。現代でいうアクロバット

・ダンスにも似ていたか。

意外に受けた。やんやの喝采であった。

「足助どの。この顔をとくとご覧あれ」

と、舞いを終えた義経を、重源は竹内足助の前につれていった。

「妙な顔立ちであろうが」

「妙な顔立ちとは——」

眼鼻立ちが小さくて、色白の若者の顔を、竹内足助は当惑げに覗きこんだ。何と返事をしていいのかわからないのである。

「この修験坊主はな。天狗の子なんじゃよ」

「天狗の子——」

九郎義経は決して眉目秀麗ではなかった。後年すっかり成長したあとも童顔であったという。それも色白で、ヒネこびた面貌と旧記は伝えている。

三

八風峠を越えると、眼下に伊勢の沃野がひろがる。じめついた近江路に比べて、そこは明るかった。大河が悠悠と流れるのである。

東大寺一行の最後尾を、九郎義経は俊乗房重源と歩いた。

「軍勢で六波羅に夜討ちをかけたということだが、手の者は何名くらいかな」

「老人一人に女二人でございました。それも老婆といささか頭のおかしな娘です」

「ハッハハハ。そんなことだと思った。しかし九郎義経と触れまわったのか」

「はい。触れまわることがねらいでしたから」

「無茶をやりおる」

「重源どの」

「何だ」

「あなたは源家の味方なのですか」

「源家の……恩顧もゆかりもない」

「ではなぜ昨日は助けてくれたのですか。もしもあのまま山伏に変装しなかったら、わたくしのことです。縄目の恥辱を受けたらみずから正体を暴露してしまったかも知れませぬ」

「そうであらうなあ」

「なぜあのようにかはってくれたのですか」

「仏道に源家も平氏もないわい。みんな人間じゃから

な。人間は生きねばならぬ」

「生きねばならぬ——」

「さよう。どんな目に遇っても生きねばならぬ。わしら仏門の身は、どんな人間でも生きようとする者は助けねばならぬ」

「……」

「九郎どの。このことはよくよく心にしまっておくがよい。いかなるとき、いかなる困難が訪れても生きぬくとだ」

「しかし武士は散りぎわこそ大事と教えられて来ましたが」

「死ぬということは、小っぼけな人間が勝手に決めるものではない。慈悲深い阿弥陀仏のお迎えを得てこそ初めて往生をとげるのだ。お迎えを得るまでは、どんなことがあっても生きぬかねばならない」

伊勢路で受けた俊乗房重源からの教訓は、後年になって九郎義経の胸中でよみがえった。

それは兄の頼朝に追われ、近畿各地を逃げまわり、絶望的な逃走路を北陸に求めたときである。

何としても生きぬかねばならぬ。義経は決意した。手段方法もこの八風峠での体験を最大限に生かしきつ

＜谷間を行く義経一行＞



た。山伏姿に身をやつし、安宅の関所をくぐりぬけたのである。俊乗房重源の「勸進帳」も巧みに利用している。すべてはこの日のままであった。八風峠の頂上には小さな祠があった。

八風明神がある。そこで読経した一行は荷をおろした。持参した握り飯を食いはじめた。もう午の刻限だ。

「この明神は？」

義経は訊いた。

「木地師の祖が祀ってある」

「木地師——」

「知ってしようが、木地挽きという細工物があろうが」

「ははあ」

「このあたりには木地師が住みついておる。彼らは当然。山の抜け道に精通しておる。九郎どの、おぼえておくがいい。山へはいったらまず木地師を探がすことだ。思わぬ道が発見できる」

重源が戦略戦術について忠告していることが義経にはわかった。

「重源どの、だいぶあちらこちらをお歩きですなあ」

「だいぶどころか、宋の山々だって歩いておるぞ」

「宋の山々——」

「わしはな、各地を歩きまわり、一箇寺でも一堂でも仏跡を建立することが生涯の目的だ」

「そういう話はおねてうけたまわっております」

「かつて宋に滞在したときな、唐朝の滅亡とともに各地で寺院伽藍が破壊されつくしたままになっている姿を目撃した。悲しかった。戦乱は何でも破壊しつくす。われらのなすことは、一箇寺一堂でも多く仏跡を建立することだと決心したんじゃよ」

「とすると、わたしはその破壊者の側に立つことになりませんか」

「多分な」

「重源どのと根比べですね」

「いくらでもこわすがよい。わしが端から作り直してやる」

「しかし重源どの、わたくしと貴僧とはだいぶ年令が違います」

「ほほう、そんなに長く生きるつもりか」

「長く生きる……」

ずばり言われて、義経はちょっと暗然となった。弓矢を取る者の身、明日の生命も保証され得ないのである。

「さっきの話ですが、阿弥陀さまのお迎えがあるまで生

き抜けとおっしゃいましたが、殺される運命はどういうことなのでしょう」

「殺される運命か」

「敵に殺される場合も阿弥陀さまのお迎えがあったからでしょうか」

「もちろんだ。ただしだな、心に阿弥陀仏を念じた場合だけに」

「阿弥陀仏を念ずる」

「念じた場合だけは、忌まわしい運命も来迎という輝かしい往生に変ずる」

「念仏することですな」

「そのとおりだ」

一行は出発した。視界は再び山塊と樹林でさえぎられた。茨川の奥流が山肌を裂いて流れる。川鹿の声がますびしかった。嵐気が迫ってくる思いである。

いまの俺は――

と、九郎義経はおのれの運命を思った。こうした谷間を歩いているのだ。いつか抜け出して見せる。いつかさつき見たあの伊勢の沃野のようなひろびろとした地平へ脱出するのだ。現在そこに蟠居する平家一門を蹴散らし九郎義経は、ふつふつと戦意が高まるのをおぼえた。

二 編集後記 二

○最近地震について憂慮されている。工業都市、川崎では異常な地盤隆起が記録されかつ地上水が上昇していることなどが分かつたところから、東京を中心とする巨大都市の住民たちは、日ごとに不安を募らせている。大正十二年九月一日の関東大地震では、十二万五千の人命が失われたとのことであるが、その際のマグネチュードは、7・9度だったという。ある専門家によるとたとえばマグネチュード6程度の地震が発生しても、現在の東京では空前の大災害になるという。もし市民たちが家路につく時間帯に大地震が発生すれば、数百万人が地下鉄や通勤列車に閉じ込められてしまう路上ではおびただしい数の自動車が立往生することになるだろう。あれこれ思いをいたすとぞつとするが、しかし天災は忘れた頃にやつて来るの故事にならない、心がまえを養つておく必要がある。

○天下泰平でいるときは、信仰や宗教の問題を掘り下げて自己の問題意識として考えるににくいものである。しかし日常生活において真実の人間性を開発するためには、どうしても信仰を深めていかねばならない。念仏こそ真の自己発見の大道である。

○本会関係の先生方の動向——本年四月一日付で大正大学々長に中村康隆師就任、真野正順博士の門下で宗教社会学の權威、浄土宗静岡教区実相寺住職、大学運営のむずかしいときだけにその才腕多に期待される。同じく正大事務局長に真野竜海師就任、専攻は梵文学で学問の深さとなにより人間の誠実さが多くの信頼をうけている。淑徳短大の村瀬秀雄師は、同大学図書館長に就任され、ますますその手腕を振われることになった。各師の御自愛御活躍を祈る。編集長の長谷川宣丈氏もまたこの度ヨーロッパへ史蹟調査旅行、浄土の視野もいよいよ国際的。愈々御支援を乞う。

「浄土」購読規定

会費一カ年金二、〇〇〇円

(送料不要)

浄土 五月号

昭和十年五月二日
第三種郵便物認可

昭和五十年四月二十五日 印刷
昭和五十年五月一日 発行

編集人 宮林 昭彦
発行人 佐藤 密雄
印刷人 関 二三男
印刷所 三幸社印刷所

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六
発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇二 振替東京八二一八七番

「浄土」教化トラクト

『お ぼ ん』

新書判・表紙共12頁

定価 一部 18 円 (200 部 以上 16 円)

送料・実費



『五重相伝の手引』

A5判 16ページ 定価 85円

(200部以上 80円・送料実費)



『和文浄土三部経』

附 法然上人撰「三部経釈」抄述

新書版 204ページ 定価200円



好評『法然上人と浄土宗』

B6判 96頁 定価180円 (〒70円)

(200部以上 単価160円 送料実費)

現代に生きる法然上人のみ教えを、平易に解説。併せて念仏信者としてあるべき道を示したトラクト。施本等に広くご利用下さい。



〒102 東京都千代田区飯田橋 1-11-6

発行所 法然上人鑽仰会

電話 (03) 262-51944 番